

「文化講座」のこと：当時の聴講生T氏と語る（回想三〇年：法政大学日本文学科の歩み）

鈴木，福五郎

（出版者 / Publisher）

法政大学国文学会

（雑誌名 / Journal or Publication Title）

日本文学誌要

（巻 / Volume）

11

（開始ページ / Start Page）

80

（終了ページ / End Page）

83

（発行年 / Year）

1965-03-23

（URL）

<https://doi.org/10.15002/00019107>

えられてからにわかには活気づいて、研究会などがしばしばもたれたことを覚えている。

わたくしが先生の歌舞伎論を聴講する機会にめぐまれたのもそのころのことであった。古い「国文学誌要」が、今あるような「日本文学誌要」として再出発したのも近藤先生のおちからぞえによるものであった。

わたくしは昭和六年に卒業したのだから、昭和七年に法政で講義をはじめられた近藤先生をもちろん知るよしもなかったのだが、卒業後研究室の助手を嘱託されたからである。

法政に付属していた夜間商業学校の国語講師にするから昼間の助手を無給でせよというので講師に任命された。

この夜間講師たるや時間講師で月平均三〇円程度。程度というのは出講日が祭日や、学校行事などにかさなると、たちまち手当に影響すると思うのだから今から思うとなさけないほどのものであった。任命権者は当時の主任教授小山竜之輔先生であって、もちろん近藤先生ではなかった。小山先生も故人となられたと聞いている。

わたくしの無給助手時代は、二、三ヶ月でまもなく他に転じたのであるが、この二、三ヶ月の期間が、近藤先生やいまは亡き片岡良

一先生にお会いする機縁になったのであるからありがたいと思わねばならない。

なお近藤先生の厳父、藤村作博士には在中三年間つづけて西鶴や近松の講義をおききした。そのわたくしが土佐の大学で、近世文学の講義をやっているのだから人間の運命などふしぎなものだと思う。

(高知大学教授)

「文化講座」のこと

―当時の聴講生T氏と語る―

鈴木 福五郎

(昭和二年三月卒業)

S 早速ですが、何か文化講座のことを思い出してくれませんか。こんど「思い出」を書くことになりましたのでね。

T あれはいつ頃でしたかね。

S 昭和一三年です。

T 二五、六年前の話ですね。もうそんなになりませんかね。

S 講師の顔ぶれで記憶に残っている方は？

T そうですね。片岡良一さん近藤さん本多

顕彰さん佐藤信衛さん谷川徹三さん樺俊雄さんそれから飯島正さんあたりの名は覚えていますが。

S 講義で記憶にあるものはどんなものでした。

T それがどうもはつきり記憶にないのですが、ただ、あらえびすさんの音楽(レコード・名曲)解説と中島健蔵さんの歐洲文芸史の話は面白くうかがいましたね。

S 映画論の岩崎昶先生や舞踊の芦原英了先生などはいかがでした。

T 芦原英了さんはおられましたね。確かにおられました。

S あの時の聴講料は三円だった筈ですが。

T へえ、三円でしたかね。私があの時謡曲の稽古に行くのに月謝が三円でしたから……。そうそうその位だったでしょう。

S あの当時の法政は実にケチ臭くてね。

『文化講座』も独立採算制でやれというような、しみつたれた話だったので、講師への謝礼も外部からお願ひした方が五円。内部の先生方は四円で、先生によっては無報酬でした。謝礼として差上げるのは恥かしかったので、「お車代」としてお納めいただきましたが、今になって考えてみれば良

先生方が来て下さったと思いますよ。もつとも私が事務員として月俸二〇〇円。研究室助手として手当年俸二〇〇円でしたからね。

T 私は終りまでは聴講しなかったのですがいつ頃まで続いたのですか？

S 昭和十三年四月一五日から翌一四年四月二〇日まで、土・日・祭は休み、五時二〇分から八時三〇分までということになっていました。講義式のものど講読式のものどあって、「任意選択聴講」の筈だったのですが、何を選ばれましたかね。

T さあ何でしたかね。一日御二人の場合と御三人の場合があつたようでしたが。

S さきほど、あら・えびさんと中島さんの名が出ましたが、お二人には、こんな話があるんですよ。あら・えびす先生のお宅へ当時成城だつたと思いますが、そのお宅へ伺って講師をお引受け下さるようお願いしましたら、にこやかに「何をどのようにするのですか？」と仰言るので「なさりいようになさって下されば結構でございます」とお答えしましたら、「電番は大学に備付けがあるのでしようね」ときかれて「いやそれが無いのでございます」と答えたものゝ実にバツが悪かつたですよ。「そ

うするとその都度何処から借りることになりますね」「ヘア」では九段下に名曲堂という店がありますから私が紹介してあげましょう」「まことに恐れ入ります」という具合で万事OKでした。そこで聊か氣をよくして「先生のあら・えびすというお名前はフランス語ですか？ またどういう意味なのでしょう？」と伺つて見せしたら、「あれは日本語ですよ。私の遊名である料亭へ行つたらその女将が「あら、えびすさまみたいね」といったのでそれから道楽の方に「あら・えびす」を使っています」と仰言つたので一ぺんに親近感を覚えましたね。レコード解説、大衆小説作家川柳の選者、新聞社の重鎮とずい分忙しい先生だとそれこそ印象的でしたね。中島先生の方はね。銀座の出雲橋のたもとに「長谷川」という小料理屋があつて、その頃河上徹太郎・小林秀雄・横光利一・井伏鱒二・吉田健一・中島健蔵氏などがよく集つていましたね、中島氏の顔はその頃から私は知っていたのですが、法政の先生とは知らなかった。文化講座で講師ときまつた時は何か妙な氣持がしましたね。それからいろいろお世話になつていろいろうちに講座の帰り

に中島先生と銀座で一パイやった時「豊島先生という方はむずかしい方ですね。この間先生のお宅へ添書をいただきにあがつた時暮をうつておられて暫く待たされましてね。相手の方が、早く書いてやれよ、といつて下さつても、オイどうせ明日から使うのだから！」といつてずい分待たされまして「たよ」と話したら、「そんな事は軽い方だぜ。俺なんか一緒に飲んでかんぽんになつて、しちりんに火をおこしたまま田々に乗つて本郷まで送つて『一パイ付合つて行け』といわれたこともあつたぜ」といわれたので、上には上があるものだと思ひましたね。中島さんが講座のためにあれだけやつて下さつたのは豊島先生の分まで動いて下さつたのでしようね。

T それはいい話ですね。それを是非お書きなさいよ。

S もう少し何か思い出してくれませんかたとへばね。ダンテ・ゲーテ・ダーヴィンチ・バルザック・シェークスピア・ロマンローラン・ローレンス・フロイベル・ポー・トルストイ・ドストエフスキー・チェーホフ・四迷・鳴外・漱石・鏡花・一葉・花袋・独歩・荷風・竜之介・直哉等々そんなに盛

暗黒の時代

庭山 積

(昭和十七年九月卒業)

れていて、やりにくかったですね。よくあれだけの講座がもたれたと思いますよ。国・仏・英・独・哲・心・社の先生方が一つになって最後の学問の自由を守ろうと「文化講座」のために力おしまず働かれ、外部からも優れた先生方がその気持をよく汲んで下さって、本当に熱心にそれぞれの部門を担当されたのですからね。それに当時心理学研究室におられた乾孝さん、吉田正吉さん、社会学研究室におられた斉田隆さん一期先輩の熊谷孝さんたちが何かと実によく手伝って下さいました。私は青木健作先生、豊島与志雄先生、近藤忠義先生の紹介状をもって昼間は国文学研究室助手の肩書で講師の交渉と連絡、夜間は講座の事務員で受付の窓口に坐っていましたから、先生方の講義は聴き度くても聴かれません。それだけは今でも残念に思っています。しかし講座の意義とか仕事のやり甲斐とかいうことを考えると幅もあり奥行もあつた講座だけに何か誇りを感じますね。いま法政の文学部があれば大きくなったのも、当時の先生達や学生達がしんげんに学問の自由を守って根をおろしたからだと思えますね。よく頑張ったもんですね。

法政の国文科が近藤忠義教授の検挙によって壊滅的打撃を受けたのは昭和十九年一二月であつた。

連日、米軍機B 29が、東京の空を夜といわず、昼といわず襲つて来て、旋回しながら偵察し太平洋上に姿を消した。もう街には物資が欠出し、お堀の向うの坂下のソバ屋が模様替えした、雑炊食堂の前には延々たる行列が作られ、雑炊にうどんをまぜてこね合せたような無気味な食べ物で空腹を満たそうとする人々が並んでいた。国民服にゲートル巻きの男やモンペ姿の女達が防空ズキンをかむり、鉄カブトを背につるしている風景が見られた。

ちようどそのころ、僕はすでに卒業していた、法政大学の構内にあつた商工学校に勤めていた。

その日、土手公園の鉄柵のところへ、僕を呼び出した正木君から、近藤先生の奥様の伝言を聞きながら、僕は思わず暗然とした。その一ヶ月前に小原君が五中(現・青山高校)の生徒を連れて勤労働員で出勤中の工場から検挙されていた。僕はそのとき、近藤先生を案内して、小原君のお父さんの勤めておられた足立中学へ行つた。その道々、近藤先生のお話から御自身の検挙も近いことを予測しておられることがわかつた。すでに夏のころには小田切さんも検挙されていたのだ。

そのころの僕は、お茶の水近くの下宿から法政まで通っていたが、夕方、下宿に帰ると内がわからふすまに鍵をかけて、真暗な闇の中で、畳にはうようにして寝たままじっと動けない状態で、しばらくそうしていた記憶がある。極度に緊張した精神状態で過した日々は、僕の経験の中ではあの時期だけだった。今、思い出しても不快である。

僕が在学したのは昭和一五年四月から昭和十七年九月、戦争激化にともなう繰り上げ卒業の日までであつて、入学当初はまだ第二次大戦には突入していなかつたところであつたら、しばらくのあいだかなり閑かに過すことが出来た。